

# ポジティブリスト・ネガティブリストから見た聖書のみ言

## 第1回 創世記における祝福と戒め

### 1. 本シリーズにおける用語の定義—ポジティブリストとネガティブリスト

本シリーズでは、「ポジティブリスト」と「ネガティブリスト」という二つの用語を用いて、聖書における神の命令構造を分析していきます。

一般に「ポジティブリスト」とは、「何をしてよいか、あるいは何をすべきか」を明示する方式を指し、「ネガティブリスト」とは、「何をしてはならないか」を明示する方式を指します。これは本来、法律や規制の分野で用いられる概念です。

例えば、許可された行為のみを列挙するのがポジティブリスト方式、禁止事項のみを列挙するのがネガティブリスト方式と説明されます。

本シリーズでは、この一般的な定義を踏まえつつ、次のように神学的に整理して用います。

すなわち、ポジティブリストとは、「人間はいかに生きるべきか」「どの方向に向かうべきか」を示す積極的命令の体系であり、ネガティブリストとは、「人間が越えてはならない境界」「関係や秩序を破壊する行為を防ぐための禁止」を示す命令の体系である、と定義します。

このように整理すると、ポジティブリストは「目的」や「方向性」を示し、ネガティブリストは「境界」や「保護」を担うものとして理解することができます。言い換えれば、前者は人間を前に進ませる力であり、後者は逸脱を防ぐ力であると言えるでしょう。

なお、これらの概念には厳密な意味での唯一の呼称があるわけではなく、「積極命令と消極命令」「命令と禁止」「規範と禁令」などと表現することも可能です。

しかしながら、「ポジティブリスト／ネガティブリスト」という対比は、現代の制度論や法体系とも接続しやすく、また両者の機能の違いを直感的に理解しやすいため、本シリーズではこの用語を採用します。

この視点に立つと、聖書は単なる道德規範の集まりではなく、「どのように生きるべきか」という積極的な方向づけと、「どこまでが許されるか」という境界設定とを併せ持つ、きわめて構造的な啓示として読むことが可能になります。

## 2. 創世記に示された二つの命令—祝福と戒め

このような観点から聖書を読み直すと、その最初の書である創世記の中に、すでにこの二つの命令の原型が明確に示されていることに気づきます。

創世記 1 章 28 節には、次のように記されています。

「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。」

このみ言は、人間に与えられた最初の命令であり、同時に祝福でもあります。ここには、「何をしてはならないか」ではなく、「どのように生きるべきか」が積極的に示されています。

一方で、創世記 2 章 17 節には、これとは対照的な命令が記されています。

「善悪を知る木からは取って食べてはならない。」

ここで初めて、「してはならない」という形の命令が登場します。この命令は、人間の行動に対して明確な境界を設定するものです。

## 3. ポジティブリストとしての祝福—人間の目的と方向性

創世記 1 章 28 節のみ言は、典型的なポジティブリストであると言えます。人間は命を生み、増え広がり、地に満ち、これを治める存在として創造されました。

ここで重要なのは、この命令が単なる許可ではなく、「方向づけ」であるという点です。人間は何をしてもよい存在ではなく、一定の目的と使命をもって存在しているのです。

したがって、このみ言は人間存在の本質を示すものであり、後のすべての倫理や使命の出発点となります。

具体的には、「生めよ、ふえよ」は人格完成と家庭の拡大を、「地を従わせよ」は自然界を治める文化的使命を示しており、この三つの方向性が人間存在の本来の目的を構成しています。

これらはいずれも、人間が積極的に世界と関わり、神の創造を完成させていく営みを指しています。

## 4. ネガティブリストとしての戒め—境界と保護

一方、創世記 2 章 17 節の命令は、典型的なネガティブリストです。

ここで示されているのは、単なる制限ではなく、「越えてはならない境界」です。人間には自由が与えられていますが、その自由は無制限ではなく、秩序の中

で行使されるべきものです。

この戒めは、人間の存在を制約するためではなく、むしろ守るために与えられたものと理解することができます。すなわち、ネガティブリストは、破壊を防ぐための保護装置として機能しているのです。

## 5. なぜ二つの命令が必要なのか—自由と秩序の構造

ここで重要なのは、ポジティブリストとネガティブリストが対立するものではないという点です。

ポジティブリストは、人間を前へと進ませる力です。しかし、それだけでは人間の歩みは保証されません。人間は自由を持つがゆえに、誤った方向へ進む可能性も持っています。

そこで必要となるのがネガティブリストです。これは逸脱を防ぎ、関係と秩序を維持する役割を果たします。

言い換えれば、ポジティブリストが「目的」を示し、ネガティブリストが「境界」を示しているのです。この二つが揃って初めて、人間の自由は正しく機能します。

## 6. 創世記はすべての律法の原型である

この構造は、創世記に限定されたものではありません。むしろ、この二重構造こそが、聖書全体に展開されていく命令体系の原型となっています。

モーセの十戒においては、ネガティブリストが中心となり、社会秩序を維持するための枠組みが形成されます。さらにイエスの教えにおいては、この構造が内面化され、ポジティブリストが大きく拡張されていきます。

しかし、そのすべての出発点は、すでに創世記において提示されているのです。

神は最初から、人間に対して「こう生きよ」という方向性と、「ここを越えてはならない」という境界を同時に与えられました。この二つの命令は、人間の自由を縛るためではなく、その自由が正しく機能し、祝福の方向へと実を結ぶために与えられているのです。

本シリーズでは、この創世記における原型を出発点として、十戒、イエスの教え、そしてパウロの神学へと進みながら、聖書全体に一貫する命令構造を明らかにしていきます。

## 第2回 モーセの十戒

### 1. 十戒の位置づけ—創世記からの展開

前回見たように、創世記にはすでに「ポジティブリスト」と「ネガティブリスト」という二つの命令の原型が示されていました。すなわち、「生めよ、ふえよ」という積極的命令と、「食べてはならない」という禁止命令です。

この二重構造は、その後の聖書全体において展開されていきますが、その最初の体系的な形として現れるのが、モーセに与えられた十戒です。

十戒は、単なる宗教的な規範だけではなく、イスラエルの民が共同体として生きるための基本原理として与えられました。したがって、ここでは創世記における個人レベルの命令が、社会レベルへと拡張されていると理解することができます。

### 2. 十戒の基本構造—ネガティブリストの体系

十戒の最大の特徴は、その多くが「～してはならない」という形で与えられている点にあります。

十戒の多くは「～してはならない」という形式をとっていますが、第四戒（安息日を聖とすること）と第五戒（父母を敬うこと）は積極的命令の形をとっています。下記にネガティブリストに該当する戒めを示します。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神があってはならない。」

「偶像を造ってはならない。」

「主の名をみだりに唱えてはならない。」

「殺してはならない。」

「姦淫してはならない。」

「盗んではならない。」

「偽証してはならない。」

「むさぼってはならない。」

このように見ていくと、十戒は典型的なネガティブリストとして構成されていることが分かります。すなわち、人間が行ってはならない行為を明確に示すことによって、関係の破壊を未然に防ぐ構造となっているのです。

ここで重要なのは、これらの禁止が単なる抑圧ではないという点です。それぞれの禁止は、神との関係、そして人間同士の関係を守るために与えられています。

### 3. 神との関係を守るネガティブリスト

十戒の前半（第一戒から第四戒）は、主として神と人間との関係に関わるものです。

他の神を持たないこと、偶像を造らないこと、神の名をみだりに用いないこと、そして安息日を聖とすること—これらはいずれも、人間の信仰が歪められることを防ぎ、神との関係を正しく保つために与えられた命令です。

ここで示されているのは、「何を信じるべきか」というポジティブな教えではなく、「何に逸れてはならないか」という境界です。すなわち、神との関係においても、まずは逸脱を防ぐことが重視されているのです。

この点においても、十戒はネガティブリストとしての性格を明確に持っています。

### 4. 人間関係を守るネガティブリスト

十戒の後半（第五戒から第十戒）は、人間同士の関係に関わる命令です。

殺人、姦淫、盗み、偽証、貪欲—これらはいずれも、人間関係の基盤を守り、共同体の秩序を維持するために与えられたものです。

ただし第五戒については、禁止形ではなく積極的命令の形をとっていることから、後節で改めて取り上げます。

ここで注目すべきは、これらの命令がすべて「最低限のライン」を示しているという点です。すなわち、「これをしてはならない」という境界が設定されることによって、社会の秩序が維持される構造になっています。

言い換えれば、十戒は「理想の社会」を直接描くものではなく、「崩壊しないための条件」を提示しているのです。

### 5. 十戒に含まれるポジティブ要素

しかし、十戒が完全にネガティブリストだけで構成されているわけではありません。

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。」

「あなたの父母を敬え。」

これらの命令は、単なる禁止ではなく、積極的な行動を求めるポジティブリストとして理解することができます。

安息日は、神との関係を積極的に保つための制度であり、父母を敬うことは、人間関係の基盤を積極的に維持する行為です。

ただし、これらのポジティブ要素も、全体の中では補助的な位置にあり、十戒の中心はあくまでネガティブリストにあります。

## 6. なぜネガティブリストが中心なのか

では、なぜ十戒はこのようにネガティブリストを中心としているのでしょうか。その理由は、人間の現実にあります。

人間は悪を行うことによって関係を破壊してしまう存在です。したがって、まず必要とされるのは、「何をしてはならないか」を明確にすることです。これによって初めて、共同体は崩壊せずに維持されます。

言い換えれば、ネガティブリストは「最低限の秩序」を守るための条件であり、その上でより積極的な善が築かれていくのです。

## 7. 創世記との関係—原型の社会化

ここで改めて創世記との関係を整理すると、次のようになります。

創世記においては、ポジティブリストとネガティブリストが個人レベルで与えられていました。それに対して十戒は、その構造を社会全体に適用したものと理解することができます。

すなわち、創世記が「原型」であるならば、十戒は「制度化された形態」と言えるでしょう。

この段階においては、まだポジティブリストは前面には出ていません。むしろ、ネガティブリストによって秩序を維持することが最優先とされています。

しかし、聖書の流れはここで止まりません。

イエスは、このネガティブリスト中心の律法を否定するのではなく、それを内面の次元へと引き上げ、さらにポジティブリストを中心とする新しい段階へと導かれました。

## 第3回 イエスの教え

### 1. イエスの教えの位置づけ

これまで見てきたように、創世記においてはポジティブリストとネガティブリストの原型が示され、十戒においてはネガティブリストを中心とした秩序の体系が確立されました。

この流れの中で、イエスの教えはどのような位置づけにあるのでしょうか。イエスは山上の説教において、次のように語られました。

「わたしが律法や預言者を廃すためにきた、と思ってはならない。廃すためではなく、成就するためにきたのである。」（マタイ福音書5章17節）

この言葉は、イエスの教えを理解する上で鍵となります。すなわち、イエスは律法を否定されたのではなく、その本来の意味を明らかにし、完成へと導かれたのです。

### 2. ネガティブリストの内面化

イエスの教えの第一の特徴は、ネガティブリストの「内面化」にあります。

十戒においては、「殺してはならない」「姦淫してはならない」といった形で、行為そのものが禁止されていました。しかしイエスは、その水準をさらに引き上げられます。

「兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。」（マタイ福音書5章22節）

「情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」（マタイ福音書5章28節）

ここで示されているのは、罪が単なる行為ではなく、心の状態に根ざしているという認識です。

すなわち、「してはならない」というネガティブリストは、外面的な行為の規制から、内面的な動機や意志の領域へと移行したのです。

この意味において、イエスはネガティブリストを廃止されたのではなく、その適用範囲を根本的に深められたと言えます。

### 3. 報復の否定と敵の愛

さらにイエスは、従来のネガティブリストの枠組みそのものを超える教えを示されます。

「悪人に手向かうな。」（マタイ福音書 5 章 39 節）

「敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」（マタイ福音書 5 章 44 節）

ここでは、「悪への報復を止める」という消極的な自制を超えて、「善を積極的に行え」という新しい段階が示されています。

従来の律法は、悪の連鎖を制限する役割を果たしていました。しかしイエスは、その連鎖そのものを断ち切る道として、「愛」という積極的原理を提示されたのです。

### 4. ポジティブリストの拡張

イエスの教えの第二の特徴は、ポジティブリストの大幅な拡張にあります。その代表的なものが、いわゆる「八福（はつぷく）」です。

「八福」とは、イエスが示された「祝福される生き方」の宣言であり、ネガティブリストを超えて、人間が本来いかなる存在として生きるべきかを示すポジティブリストの完成形です。

こころの貧しい人たちは、さいわいである、  
天国は彼らのものである。

悲しんでいる人たちは、さいわいである、  
彼らは慰められるであろう。

柔和な人たちは、さいわいである、  
彼らは地を受けつぐであろう。

義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、  
彼らは飽き足りるようになるであろう。

あわれみ深い人たちは、さいわいである、

彼らにはあわれみを受けるであろう。

心の清い人たちは、さいわいである、

彼らは神を見るであろう。

平和をつくり出す人たちは、さいわいである、

彼らは神の子と呼ばれるであろう。

義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、

天国は彼らのものである。（マタイ福音書 5 章 3～10 節）

これらは単なる禁止ではなく、人間がどのような存在として生きるべきかを示す積極的な方向づけです。また、次の言葉も重要です。

「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。」（マタイ福音書 7 章 12 節）

これは、ネガティブリストの典型である「してはならない」という形式を超え、「何をすべきか」を直接示すポジティブリストの完成形と見ることができます。

## 5. 倫理の転換

ここで起こっている変化は、単なる命令の増減ではありません。それは倫理そのものの構造的転換です。

十戒においては、「してはならない」という禁止が中心であり、秩序の維持が主な目的でした。

それに対してイエスの教えは、「どのように生きるか」という存在のあり方そのものに焦点を当てています。

すなわち、外面的な規制から内面的な変革へ、行為の管理から人間の生き方そのものへという転換が起こっているのです。

## 6. ポジティブリストの中心としての愛

イエスの教えを総括するならば、その中心は「愛」にあります。

イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主な

『あなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。 (マタイ福音書 22 章 37~40 節)

ここで示されているのは、単に数ある教えの中の一つではありません。むしろ、すべての律法と預言、すなわち旧約聖書全体が、この二つの命令に集約されるという宣言です。

言い換えれば、十戒をはじめとするあらゆるネガティブリストは、この「愛」という原理の中に包含され、その意味を与えられているのです。

このとき重要なのは、愛が単なる感情ではないという点です。ここで語られている愛は、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして」と表現されるように、人間存在の全体をもって神に向かい、また他者に向かう姿勢を意味しています。すなわち、それは意志であり、方向であり、生き方そのものです。

したがって、「神を愛する」とは、単に信仰心を持つことではなく、自らの存在全体を神に向けて生きることであり、「隣人を愛する」とは、他者を単なる対象としてではなく、自分自身と同じ重みを持つ存在として扱うことを意味します。

このように理解すると、愛は個別の行為の規範ではなく、あらゆる行為の源となる原理であることが分かります。

愛に生きる者は、結果として殺すことも、盗むことも、偽ることもありません。すなわち、ネガティブリストは外から守るべき規則としてではなく、内側から自然に実現されるものとなるのです。

このように見ると、イエスの教えは十戒と対立するものではありません。むしろ、ネガティブリストは内面へと深化し、ポジティブリストは中心的原理として前面に現れるという形で、十戒は成就されているのです。

したがって、イエスの教えは律法の否定ではなく、その本質を明らかにしたものであると理解することができます。

この流れはさらに続きます。

パウロは、イエスの教えを受け継ぎながら、それを神学的に整理し、「律法と恵み」という枠組みの中で再定式化しました。

そこでは、ポジティブリストは単なる命令ではなく、「御霊によって生きる」という内面的な生き方として理解されるようになります。

## 第4回 パウロ書簡

### 1. パウロ神学の位置づけ

これまで見てきたように、創世記において命令の原型が示され、十戒においてネガティブリストを中心とした秩序が確立されました。

そして、イエスの教えにおいては、その内面化とポジティブリストへの転換が行われました。

では、パウロの教えは、この流れの中でどのような位置を占めるのでしょうか。

パウロは、イエスの教えを受け継ぎながら、それを神学的に整理し、「律法と恵み」という枠組みの中で再定式化しました。

ここにおいて命令の構造はさらに一段階進み、外から与えられる規範から、内面において働くものへと移行します。

### 2. ネガティブリストからの解放

パウロの書簡で繰り返し語られるのは、「律法によっては義とされない」という主張です。

律法とは、主としてネガティブリストの体系です。すなわち、「してはならない」という形で人間の行為を規定するものです。

パウロは、この律法が人間を完全に変えることはできないと指摘します。なぜなら、律法は行為を規制することはできても、心そのものを変えることはできないからです。

この意味において、ネガティブリストは、秩序を維持するためには有効であっても、人間を本質的に義なる存在へと導く力を持たないという限界を抱えています。

パウロはこの点を明確にし、律法中心の理解からの転換を提示します。

### 3. ポジティブリストの中心—愛は律法を完成する

では、パウロは何を提示したのでしょうか。その核心は、次の言葉に集約されています。

「愛は律法を完成するものである。」（ローマ人への手紙 13 章 10 節）

ここにおいて、ポジティブリストは単なる補助的な要素ではなく、中心的な生き方として位置づけられます。

十戒では、「してはならない」というネガティブリストが中心でしたが、パウロは、それらすべてが「愛」という一つの方向性において要約されると語ります。

すなわち、愛する者は、殺すことも、盗むことも、偽ることもありません。ここでは、ネガティブリストは外から守るべき規則ではなく、愛に基づく生き方の中で、自然に実現されるものと理解されているのです。

#### 4. 御霊の実—ポジティブリストの具体化

パウロはさらにポジティブリストを具体的な形で示しています。

「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。」（ガラテヤ人への手紙 5 章 22 節～23 節）

これらは、「してはならないこと」の列挙ではなく、「どのような状態にあるべきか」を示すものです。

ここで重要なのは、これらが努力によって達成される行為の一覧ではなく、「御霊の実」として語られている点です。

すなわち、これらは外から課される命令ではなく、内側から自然に現れる性質として理解されています。

この意味において、ポジティブリストは単なる命令を超え、人間の内面における変化と生き方を示すものへと変わっています。

#### 5. 内面律法—心に書かれた生き方

パウロの教えにおいて、最も重要な転換はここにあります。それは、律法が石の板に書かれた外的規範から、人間の心に刻まれる内面的な導きへと移行したという点です。この思想は、旧約においてすでに預言されていたものです。

しかし、それらの日の後にわたしがイスラエル之家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にします。（エレミヤ書 31 章 33 節）

パウロはこの預言の成就を次のように表現しています。

あなたがたは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている。（コリント人へ

### の第二の手紙 3 章 3 節)

パウロはそれを明確に神学として展開しました。すなわち、人間はもはや外から与えられるネガティブリストによって導かれるのではなく、内面において働く導きによって生きる存在へと変えられるのです。

ここにおいて、ポジティブリストは完全に内面化され、生き方そのものとして定着します。

## 6. 命令から生き方へ—構造の最終段階

ここまでの流れを整理すると、次のようになります。

創世記では、ポジティブリストとネガティブリストの原型が示されました。十戒では、ネガティブリストが体系化され、秩序が確立されました。

イエスはそれを内面化し、ポジティブリストを中心に据えました。そしてパウロにおいては、ポジティブリストは単なる命令ではなく、人間の内面において働く生き方として理解されるようになります。

すなわち、ここに至って聖書に示された命令は、「守るべき規則」から「内面から湧き出る生き方」へと完全に転換されたのです。

## 7. ネガティブリストの位置づけの変化

この段階においても、ネガティブリストが完全に消えるわけではありません。しかしその位置づけは大きく変化します。

それはもはや中心ではなく、ポジティブリストの中に含まれる結果として現れるものとなります。

愛に生きる者は、結果として悪を行わない。このようにして、ネガティブリストは独立した規範ではなく、内面における生き方の帰結と理解されるのです。

## 第5回 総合比較

### 1. 全体の視点—命令構造はどのように変化したのか

本シリーズでは、創世記、十戒、イエスの教え、そしてパウロの神学を通して、聖書における神の命令構造を「ポジティブリスト」と「ネガティブリスト」という観点から分析してきました。

ここで最終的に問われるべきは、この変化が単なる形式の違いなのか、それとも歴史的・神学的な意味を持つものなのか、という点です。

結論から言えば、これらの違いは偶然ではなく、人間の状態の変化、すなわち墮落とその後の回復の過程と深く関係しています。

「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今それに堪えられない」（ヨハネ福音書 16 章 12 節）

ここに示されているのは、真理そのものが変化するのではなく、それを受け取る人間の状態に応じて、示され方が段階的であるという事実です。

神は永遠不変であり、その意図が変わることはありません。しかし、墮落した人間に対して真理を伝える方法は、歴史の中で段階を踏んで示されてきたと理解することができます。

### 2. 創世記における本来の構造—ポジティブが主体

創世記において与えられた二つの命令は、人間がまだ墮落していない状態におけるものです。

「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。」（創世記 1 章 28 節）

「善悪を知る木からは取って食べてはならない。」（創世記 2 章 17 節）

ここで明らかのように、中心にあるのはポジティブリストです。

1 章 28 節の祝福命令は、人間存在の全方向を包む積極的な使命として与えられており、2 章 17 節の禁止命令は、その使命の中に付随的に設けられた一つの境界線に過ぎません。

量的にも、構造的にも、ポジティブリストが人間への命令の主体をなしています。

人間は本来、神の意図に従って積極的に生き、世界を治め、発展させていく存在として創造されました。

一方、ネガティブリストは、その歩みを守るための境界として与えられています。

したがって、この段階においては、ポジティブリスト＝主体（本来の目的）、ネガティブリスト＝対象（保護・補助）という構造になっていたと理解することができます。

### 3. 墮落による転換—ネガティブが主体へ

しかし、人間はこのネガティブリストを破り、神との関係を損ないました。これがいわゆる墮落です。

この出来事によって、人間の状態は根本的に変化します。本来であればポジティブリストに従って生きるべき存在が、むしろ逸脱しやすい存在へと変わってしまいました。

その結果、神の命令の与えられ方も変化します。すなわち、ポジティブリスト中心の状態からネガティブリスト中心の状態へという転換が起こったのです。

この転換が最も明確に現れているのがモーセの十戒です。

### 4. 十戒の意味—崩壊を防ぐための構造

十戒においては、「してはならない」というネガティブリストが中心となっています。

これは単なる形式の違いではなく、人間の状態に対応したものです。すなわち、すでに秩序を保つこと自体が困難になっている人間に対しては、まず「どこまでが許されないか」を明確にする必要があったのです。

この意味において、十戒は本来の理想を直接示すものではなく、「崩壊しないための最低限の枠組み」として与えられたものと理解することができます。

ここでは、ネガティブリスト＝主体（秩序維持）、ポジティブリスト＝補助という構造に転換しています。

### 5. イエスにおける転換—内面からの回復

しかし、この状態が最終的なものではありません。イエスは、ネガティブリスト中心の律法をそのまま維持するのではなく、それを内面の次元へと引き上げられました。

「怒るな」「欲するな」という教えは、単なる行為の禁止ではなく、心そのものの変革を求めるものです。

「兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。」（マタイ福音書 5章 22 節）

「情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」（マタイ福音書 5章 28 節）

さらにイエスは、「敵を愛せよ」（マタイ福音書 5章 44 節）「人にしてもらいたいことを行え」（マタイ福音書 7章 12 節）と語られ、ポジティブリストを再び前面に押し出されました。

ここにおいて、ネガティブリストは内面に深化し、ポジティブリストが再び主体として現れるという転換が起こります。

これは単なる倫理の高度化ではなく、本来の状態への回復の始まりと見ることができます。

## 6. パウロにおける展開—内面における確立

この流れはパウロにおいてさらに明確になります。

「愛は律法を完成するものである。」（ローマ人への手紙 13章 10 節）

ここで示されているのは、ポジティブリストが単なる命令ではなく、人間の内面において働く生き方として確立される段階です。

御霊の実として語られる愛や喜び、平和などは、外から強制されるものではなく、内面から湧き出るものとして理解されています。

この段階においては、ポジティブリスト＝主体（内面における生き方）、ネガティブリスト＝結果（愛に生きることによって守られる）という構造に至ります。

## 7. 四段階の整理—命令構造の歴史的流れ

以上の流れを整理すると、次のようになります。

創世記：ポジティブリスト主体

十戒：ネガティブリスト主体

イエス：ポジティブリストへの再転換

パウロ：ポジティブリストの展開・発展

このように、聖書全体は、命令の形式の変化ではなく、人間の状態に応じて与えられた神の導きの歴史として理解することができます。

## 8. 結論—聖書は復帰のプロセスを示している

ここから見えてくる最も重要な点は、聖書が単なる規範の集まりではないということです。

それは、墮落によって失われた本来の状態から、再び本来の状態へと回復していく過程を示すものです。

本来、神の意図はポジティブリストにありました。人間は「こう生きよ」という神の命令に従って生きる存在として創造されたのです。

しかし、墮落によってその状態が崩れたため、ネガティブリストが前面に出ざるを得なくなりました。

そして、福音とパウロの教えを通して、人間は再びポジティブリストを中心とする本来の状態へと導かれていきます。

したがって、神はその意図を変えたのではなく、人間の状態に応じて命令の与え方を変えながら導いてこられたと理解することができます。

すなわち、ポジティブリストの回復こそが神の本来の目的であり、ネガティブリスト中心の律法時代は、その回復へと向かう途上の段階として位置づけられます。

この意味において、聖書に示された歴史は「復帰の歴史」として読むことができるのです。